Contour
diabetes solutions

コントアネクスト® Clinical News No.1

神戸大学医学部附属病院 糖尿病・内分泌内科　助教
廣田 勇士 先生

神戸大学医学部附属病院 糖尿病・内分泌内科の概要
体制：医師25人、CDE30人（看護師16人、管理栄養士7人、薬剤師3人、臨床検査技師3人、理学療法士1人）　糖尿病患者数：外来/約1,500人/月（延べ人数、うち1型糖尿病患者約250～300人、インスリンポンプ使用者約130人）　入院/約250人/年（うち1型糖尿病患者約50人、インスリンポンプ使用者約20人）

Interview
1型糖尿病患者とデバイス —コントアネクスト® Link2.4の血糖自己測定器としての可能性

1型糖尿病と先進的治療を専門とされ、日常診療からご研究、研究会のまとめ役など多方面にご活躍されている神戸大学医学部附属病院の廣田勇士先生に、1型糖尿病患者さんが抱える課題やデバイスに求められる要素、血糖自己測定器コントアネクスト® Link2.4とその専用試薬（体外診断用医薬品）コントアネクスト® センサーについて伺いました。

1型糖尿病患者が抱える課題は千差万別

1型糖尿病患者さんが日常生活の中で適切にインスリンを打つことはとても難しいことです。それは摂取する食べ物に合わせることはもとより、運動など生活の中のいろいろなイベントも考慮して、インスリンをどのように打つかを自分で考える必要があるからです。また、それら全てを医療者がその都度指導できるわけではないので、患者さん自身で会得していく必要があります。きちんと治療しようとしてさまざまな困難に直面する場合がありますが、それができず病気と向き合えない方もおられます。例えば、合併症もなく症状もないため、治療の意義を感じられず治療に取り組めない、十代の多感な年頃に発症して病気を受け入れられない、血糖測定の意義が感じられず血糖自己測定自体をうっとうしく感じている、などさまざまです。1型糖尿病患者さんにはいろいろな次元の課題があり、患者さんによって千差万別です。従って、患者さん一人ひとりにしっかり向き合い、患者さんの想いに耳を傾けることが重要です。

加えて、1型糖尿病では、血糖自己測定とインスリン注射をしても、血糖をコントロールしきれないということがあり得ます。きちんとコントロールしようとすると低血糖を起こす頻度が高まり、低血糖が別のリスクにつながることもあります。患者さんが日々の治療に取り組めるように、医師、栄養士、看護師など多職種のチームでサポートすることが大切と考えています。

薬剤やデバイスの進化により糖尿病患者のポテンシャルが広がる

ここ数年、糖尿病診療関連のデバイスが進化しています。インスリンポンプ療法に加えて、SAP（sensor augmented pump）療法もできるようになりましたし、2017年にはFGM（flash glucose monitoring）が登場しました。さまざまなインスリン製剤が開発され、より高度な治療が可能になり、糖尿病患者さんの潜在能力が引き出される可能性が高まってきました。SAP療法は、低血糖に対する不安が減り、安心感が増すという効果もあります。低血糖で困っている人や血糖変動が大きくて困っている人にとって、目視で確認しながら血糖コントロールできることは、大きな意味を持ちます。

とは言え、患者さん自身が何もしなくてよくなったということではありません。これらのデバイスをどのように活用するかも重要ですし、カーボカウントのテクニックを高めることも大切です。その結果、より良い血糖コントロール、QOLの向上につながることを期待しています。

QOLの改善を実感することが使用継続につながる

当院は大学病院であるため、通院、入院されている糖尿病患者さんの年齢層は幅広く、1型糖尿病患者さんやインスリン療法を導入している患者さん、合併症を発症した患者さんが多いという特徴があります。先進デバイスを扱っていることもあり、インスリンポンプ療法やSAP療法を導入している患者さんも多いです。

女性の患者さんはインスリンポンプ療法やSAP療法を好まれることが多いように思います。外出時にペン型イン

資料をご希望の方はこちらへ